

王貞治氏の868号本塁打 バット

王貞治氏の868号本塁打は、1980（昭和55）年10月12日、当時在籍していた読売ジャイアンツ対ヤクルトスワローズ戦（後楽園球場）で放たれた。結果的に現役最後の一打となり、生涯通算868本というNPB記録、かつ世界記録を刻んだ歴史的瞬間になった。

この868号を放った際に使用されたバットが、このたび野球殿堂博物館に寄贈された。寄贈者はフリーアナウンサー徳光和夫氏。読売ジャイアンツと王氏への深い思いを抱く徳光氏が長年大切に保管してきたものである。当館で寄贈式が行われたが、その模様は、2025年7月、BSフジ『プロ野球 レジェン堂』特別企画「徳光家の王バット 殿堂入りSP」において放送された。

バットをよく見ると、木材本来の色ではなく、蜜蝋を思わせる光沢を帯び、深い茶色に変化している。また中央部には「Jun・Ishii」の刻印があり、石井

順一氏製作の圧縮バットであることがわかる。圧縮バットとは木材に樹脂を浸透させて、樹脂が木目をつなぎ合わせ、木材自体の耐久性が強化されることで、硬さと反発性が増したバットである。1961年ごろから1981年の使用禁止まで、NPB選手のおよそ7割が使用したとされ、現在は用いることができない。こうした背景を持つ圧縮バットは、時代を象徴する用具であり、王氏の豪快な一本足打法を支えた実物として、きわめて貴重な資料である。

道具や競技を取り巻く規則は時代とともに変化する。ゆえに、このバットは単なる記録の証にとどまらず、当時の野球を想起させる文化的史料でもある。野球殿堂博物館では、常設展示室の王貞治コーナーにこのバットを展示している。700号、714号、800号の記念バットやボールとともに並ぶ姿は、王氏の偉業と野球史を一望できる展示空間を

構成している。

野球のシーズンも終盤に差し掛かるこの時期、ぜひ野球殿堂博物館に来て、現物を通じて当時の空気を感じ取っていただきたい。

公益財団法人 野球殿堂博物館
学芸員 太田若葉

